

No.10	提 案 名： 私のまちは私がつくる～宇都宮駅ペDESTリアンデッキ周辺の活性化事業～	
	提案団体名：宇都宮共和大学 西山ゼミ	
	所 属：宇都宮共和大学 シティライフ学部	
	代 表 者：石川 裕也	指導教員：西山 弘泰
メンバー	福田 珠花, 高橋 翔太, 大久保 友翔, 野村 陸, 埴 夏唯斗, 福田 哲士, 関口 夏鶴, 重松 咲来	

## ○ 提案の要旨

本提案は、JR 宇都宮駅西口のペDESTリアンデッキの有効活用と学生や若者が宇都宮市内でまちづくり活動を活発に展開するための方策と可能性を、ペデフェス！（国体おもてなしイベント）を通じた実践的的事业から提案するものである。提案者らは、2022年3月から地元自治会、事業者、クリエイター、地元住民、そして行政より構成される「西口懇談会」を組織し、JR 宇都宮駅西口周辺の活性化について議論してきた。その結果、本年10月に開催された「いちご一会とちぎ国体」に合わせ、学生と地域が連携したおもてなしイベントを開催するに至った。なお、過去に行われた国体のおもてなしイベントは、すべて行政やそれに準ずる団体が主体である。すなわち、学生主体のイベントとしては、日本で最初の試みとなる。当イベントの概要は以下となっている。

名 称	ペデフェス！～いちご一会とちぎ国体おもてなしイベント2022～
場 所	JR 宇都宮駅西口ペDESTリアンデッキ
期 間	2022年9月30日（金）～10月11日（火）
目 的	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 全国から来る選手や観客に対しおもてなしを感じられる空間を創出するとともに、栃木県や宇都宮市の魅力を知ってもらう</li> <li>● ペDESTリアンデッキがイベントや交流空間として有効か検証する</li> </ul>
コンセプト	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 芸術（アート）や音楽を発信し、楽しめる場の創造</li> <li>● 至近を流れる田川に着目し、水やそれにまつわる物語（黄ぶな）や産業（宮染め）を感じさせる空間の創造</li> <li>● 学生だけでなく、住民、企業、行政、市民が企画立案・準備に関わる協働のまちづくり活動</li> </ul>
実施体制	ペデフェス！実行委員会（築瀬地域まちづくり推進協議会、宇都宮共和大学西山ゼミ、いちご一会とちぎ国体とちぎ大会宇都宮市実行委員会、とちぎ地元の酒で乾杯フェスタ実行委員会、栃木県デザイン協会、西口ビル管理㈱、市民有志により構成）
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>● おもてなし路上ライブ（オープニングイベント、ステージイベント）</li> <li>● 飲食ブースの出店（とちぎ地元の酒で乾杯フェスタ）</li> <li>● 会場装飾（黄ぶな広場、宮竹灯ろう）</li> <li>● プロジェクションマッピング（「黄ぶな物語」の上映）</li> <li>● 国体おもてなし駅ピアノ（宇都宮ジャズ協会との連携事業）</li> <li>● 顔はめパネルの制作・設置</li> </ul>
運営資金	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 宇都宮市内外の16事業者から協賛金50万円を受領（学生が一軒一軒訪問）</li> <li>● いちご一会とちぎ国体とちぎ大会宇都宮市実行委員会の運営費等</li> </ul>

本イベントの開催によって得られた成果や課題は以下となっている。

- 学生でも壮大な規模のイベントを成功させることができる。
- 学生が協賛金50万円を集め、公的資金を頼らないスキームを提示した。
- ペDESTリアンデッキは市内外の人が多く訪れ、市民や来街者が集う交流空間になる。
- 当エリアの利用には、様々な制約や行政手続きをクリアする必要があり、合法的にイベントを開催するにはハードルが高い。また学生たちがすべてを行うことは不可能。

以上のような成果と課題から、提案者たちは若者がまちの活性化を担う存在として大きな可能性を秘めていることを実感した。そして、それらを支える環境や仕組みづくりの必要性も認識した。そこでうつつのみや市政研究センターに若者のまちづくりを支援する「若者まちづくりコーディネーター」の設置と、市民・企業の有志からなり若者のまちづくりを支援する「若者まちづくりアドバイザー」の創設を提案する。

## 1. 提案の背景・目的

市民主体のまちづくりが叫ばれて久しい。東京などの大都市においては、市民や企業が中心となり、魅力的なイベントや事業が展開されているが、地方都市においては、まちづくりの担い手は行政である場合が多いように思われる。本提案の背景は、地方都市においても、市民が自らの意思と創造力に基づき、まちづくりを宇都宮でも根付かせたいという思いからである。そしてそれを担っていくのは、提案者たちのような若者であると考え。考え方が柔軟である若年世代が主体的にまちづくりに関わる経験をし、成功体験を積むことは、将来的な市民主体のまちづくりの基礎を築くことになる。本提案の目的は、若者を中心としたまちづくり活動の可能性と課題、そしてそれを後押しする体制の構築を提案することにある。

## 2. 提案の目標・課題「私たちから始めよう にぎわいアクション」との関連

本提案は、今回のまちづくり提案のテーマと多くの点で合致している。まず、国体のおもてなしイベントの企画は、提案者たちであり、様々な組織や団体、個人の賛同・協力を得て実施された。つまり「私たちから始めた」事業である。そして、ただの提案だけにとどまらず、実証済みという点が最大の特徴である。

また、宇都宮駅西口のペDESTリアンデッキにおいて大いににぎわいをもたらした。具体的には、ライブイベントと飲食イベントが行われた3日間には、延べ3,000人以上が訪れ、当エリアの賑わいを創出した。以上の実践的提案により、ペDESTリアンデッキが人が集う交流空間としてのポテンシャルが大きいことが証明された。

## 3. 現状分析

### 3.1 西口懇談会の結成

#### (1) 西口懇談会とは

西口懇談会は、大学教員と学生、市民、事業者等が集い、JR宇都宮駅西口地域の活性化を目指す任意団体である。2022年3月に実施したまち歩き（以下で詳述）の際、参加者の地域住民から結成が提案されたことにはじまる。ひと月に一度程度宇都宮共和大学に集まり、西口周辺の課題や活性化の方策を話し合うだけではなく、実際にアクションを起こすことを目的にしている（表1、写真1）。ペデフェス！においても、西口懇談会のメンバーが中心となり運営を行った。今後同様のメンバーで活動していく予定である（住民や企業から懇談会存続の強い要望があった）。

#### (2) 宇都宮駅西口周辺のまち歩き

2022年3月3日に宇都宮駅西口周辺のまち歩きを行った。このまち歩きの目的は、当地区の課題を洗い出すとともに、利活用や賑わい創出に向けた可能性を見出すことにある。参加者は、学生9名（宇都宮共和大学、宇都宮大学、作新学院大学、北海道大学）、行政職員（7名）、地元自治会関係者（3名）、民間事業者（4名）、西口地権者（1名）、アーティスト（1名）、マスコミ（1名）、政策アドバイザー（1名）、大学教員（1名）の28名である。まず、宇都宮駅西口の餃子像

前に集合し、ペDESTリアンデッキ周辺を散策した（写真3）。その後、宮サイクルステーションや大型商業施設のトナリエ、旧篠原家住宅、田川遊歩道をまわった。

表1 西口懇談会の実施日と議題

実施日	内容	参加人数
3月3日	まち歩きとワークショップ	28名
3月13日	ペDESTリアンデッキの清掃活動	14名
3月29日	まち歩きと清掃活動の振り返り	15名
5月13日	企画提案①	16名
6月17日	企画提案②	21名
7月8日	企画提案③	19名
7月28日	企画①	20名
8月31日	記者会見、準備	32名
10月21日	ペデフェス！反省会	23名
11月18日	企画提案、今後の活動について	13名



写真1 西口懇談会の様子



写真2 まち歩きとワークショップ



写真3 ゲリラ清掃の様子とチラシ



終了後、宇都宮共和大学で政策アドバイザーである毛塚幹人氏をコーディネーターにワークショップが実施され、散策エリアの課題や利活用の可能性、具体的な方策について意見が交わされた。その結果は以下のようにまとめられる。なお、当まち歩きは3月9日付の下野新聞に「駅周辺の魅力を点検 学生、住民ら意見交換」という見出しで報道された。

【課題】

- ① 広い空間があるにも関わらず、ベンチなどゆっくりくつろげる場所が少ない
- ② 公共施設（バスも含む）がどこにあるのかわからなかったり、利用できず使いづらい
- ③ 雑多な印象を受け、何が宇都宮の売りなのかわからない
- ④ 歩行者、自転車、自家用車、タクシー、バスが入り乱れていて危険
- ⑤ 宇都宮駅の西口と東口が分断されている（行き来が困難）
- ⑥ アートや歴史など文化的要素が全く感じられない

【解決策】

- ① ベンチやちょっとした遊具を設置して様々な人が憩える場所をつくる
- ② 宇都宮らしい統一されたデザイン（色や模様）にする
- ③ 誰もが気軽に利用し、それを市民が管理できる場にする
- ④ 情報発信場所の統一（1か所で様々な情報を得られるようにする）
- ⑤ アートを楽しめる空間にする
- ⑥ 田川と駅の導線をつくり一体的な空間を創造する

(3) ペDESTリアンデッキにおけるゲリラ清掃

3月3日のワークショップ終了後、参加者から「ペDESTリアンデッキの清掃をしてみてもどうか？」という提案があった。そこで、3月13日（日）13時から1時間半程度、ペDESTリアンデッキの清掃を行った（写真3）。そこで得られた結果は以下である。

【結果】

- トングを使ってデッキ上のゴミを拾ったが、ゴミは少なかった。ただ、植栽の裏からは、缶や瓶、紙屑、外れた張り紙などが回収された。
- 雑巾で看板や手すり、光窓などの拭き掃除を行った。看板なども目立った汚れはないが、拭くとそれなりに煤や塵で雑巾が真っ黒になった。また、鳥の糞なども気になる。

【今後デッキでできそうなこと】

- デッキ内の東西通路で音楽ライブやマルシェなどを行うことができる。
- ベンチをもっと増やすとともに、ベンチの間に竹や植栽などを置くとアクセントになる。
- 南北通路の植栽などを取っ払って、広い導線を確認したらよい。
- 剥がれたタイルにデコレーションした大谷石を張ったり、駅の側壁にアートを掲げる。

## 4. 施策事業の提案

### 4.1 事業の企画

3月29日にまち歩きと清掃活動の振り返りを行った。提案者の一人である石川から、ペDESTリアンデッキにアートを設置する案が出されると同時に、西口懇談会のメンバーでもある、いちご一会とちぎ国体とちぎ大会宇都宮市実行委員会（以下、市国体局）の坂井氏から「国体に合わせたイベントをしてみてもどうか？」との提案があった。これにより、国体における選手や観戦者をもてなすためのアート空間の設置が決まり、デザイン等の企画を開始した。

第1回目の企画提案は、5月13日に行われた。石川が中心になり、具体的な企画書を提示、説明が行われた。提案では、デッキのタイルが剥がれたり、アスファルトで補修されている部分に、モザイクアートを施す案と、路上ペイントを提示した。メンバーからは、アートだけではなく、音楽イベント（路上ライブ）や飲食イベントの実施が提案され、①アート空間の設置、②ライブイベントの実施、③飲食の出店、を行うこととなった（表2）。

イベントを実施するにあたり、デッキを管理する道路管理課にアート空間の設置やライブイベントの実施について、可能かどうか確認する必要がある。そこで道路管理課に事前相談に伺った。結果としては、安全性や設置後の管理の課題から、歩道部分へのアート設置については難しいとの見方が示された。一方、ライブイベントや飲食の出店に関しては、通行人の導線や点字ブロックの確保などを条件に「実施可能」との見解であった。

道路管理課との事前打ち合わせの結果を踏まえ、常設の設置ではない方法によるアートの設置を模索した。6月17日に行われた西口懇談会において「宇都宮の歴史や田川との関連性を持たせた設置物が良い」との意見が出た。その意見を参考に以下のコンセプトと広場の構想が生まれた。

#### 【コンセプト】

- 宇都宮の近隣を流れる田川で黄ぶな伝説が生まれた
- 田川沿いではかつて豊富な水量と清らかな水質のため宮染めが盛んに生産されていた  
⇒田川の清らかな水にちなんだ空間をデッキで演出する
- 様々な事業者や団体、個人を巻き込みながら、クオリティが高いイベントを開催する

#### 【広場の装飾とそれにかける思い】

- 宮染めに様々な黄ぶなをプリントしデッキの転落防止柵に垂らす「黄ぶな広場」を制作する
- 選手や来訪者に豊富で清らかな水に育まれた栃木の歴史や文化を知ってもらおうとともに、それらの人々の無病息災（コロナ除け）を願うパワースポットにする

このようにおもてなしイベントの内容が3か月以上の期間を費やしようやく固まった。しかしながら、資金やライブイベントなど、以後も多くの課題が待ち受けていた。

### 4.2 事業の準備

6月17日の西口懇談会において、①黄ぶな広場の制作、②おもてなし路上ライブの実施、③飲食イベントの開催、④宮竹灯ろうの制作、⑤プロジェクションマッピングの実施、⑥顔はめパネルの制作、⑦駅ピアノの設置、が決定された。しかし、これらすべてを学生中心に実施するのは難しい。そこで黄ぶな広場に関しては、栃木県デザイン協会の全面的な協力のもと、当会に所属するデザイナーの宇賀地裕子氏と建築家の古溝政利氏にデザインや設営の指導をいただくことになった。また、飲食に関しては、かつてデッキで飲食イベントの経験がある「地元とちぎの酒で乾杯フェスタ実行委員会」（以下、乾杯フェスタ実行委員会。県内の酒造会社、クラフトビール製造者で構成される組織）に飲食イベントを行っていただくなど、様々な組織の協力を取り付けた。

#### （1）黄ぶな広場の制作

先述のように、黄ぶな広場は宮染めに黄ぶなをプリントした反物をデッキの転落防止柵に取り付ける。それには宮染めの入手が必要である。そこで地元の福井染工場に幅約30cmの青の反物を計200m発注した。次に黄ぶなのデザインである。新型コロナウイルスが蔓延して以降、黄ぶなが注目され、様々な企業がオリジナル黄ぶなを作成している。そこで、黄ぶな推進協議会・会長の関口慶介氏に事業の説明を行うとともに、加盟企業のご紹介とロゴ提供の仲介をお願いした。

表2 ベデフェス！実施までの経過（一部）

	内容	結果
5月	西口懇談会での第1回企画提案 アーティストやクリエイターに相談 市道路管理課に事前相談 ライブイベント出演者への出演依頼開始	アート空間、ライブイベント、飲食販売を行うことが決定 デザイナーとシンガーソングライターから指導 ペイントは難しいとの感触 デッキで路上ライブを行う横田悠二氏等に依頼
6月	西口懇談会での第2回企画提案 建築設備業者への相談 マツヅクリ・ラボラトリー代表の村瀬氏に相談 福井染工場への宮染め購入に関する相談	アート空間を「黄ぶな広場」とすることが決定 黄ぶな広場の構造を検討 飲食イベントの方法や段取りについて指導 色やサイズが確定し購入することを決定
7月	協賛金の呼びかけ開始 クラウドファンディングの準備 地元とちぎの酒で乾杯フェスタ実行委員会への相談 市道路管理課および国体局との現地視察(7/17,23) 宇都宮共和大学学生の黄ぶなデザイン制作 西口懇談会においてイベントの具体策を協議 黄ぶな推進協議会に協力依頼	市内大手企業を中心に協賛の呼びかけ開始 「CAMPFIRE」でクラウドファンを行うことが決定 協力の了承をいただく 導線確保や設置方法・場所について確認 募集に対し12のオリジナル黄ぶなが集まる イベントの名称を「ベデフェス！」とし実行委員会を設置 企業等への黄ぶなデザイン提供の依頼・収集開始
8月	二葉幼稚園でのオリジナル黄ぶな制作ワークショップ チラシ制作開始 JR宇都宮駅の駅長に挨拶 宇都宮ジャズ協会との協議 プロジェクションマッピングのテスト 顔はめパネルのデザイン考案 黄ぶな宮染めの試作 記者会見	20名の園児が38のオリジナル黄ぶなをデザイン 石川が中心となり実施 実施について説明⇒ご理解をいただく 駅ピアノの設置と運営について連携することが決定 投影できることを確認 福田珠花が中心なりデザイン 作業工程を確認 マスコミにベデフェス！について説明(於:共和大)
9月	下野新聞に記事掲載 チラシ完成・配布と掲示の開始 市道路管理課に道路占用許可提出 電源の利用を都市基盤安全センターに依頼 黄ぶな宮染めと宮竹灯ろうの制作 ベデフェス！の協賛ポップと説明版の作成 二葉幼稚園での園児たちに国体ダンスを指導 宇都宮東警察署に道路使用許可提出 協賛金50万円達成 黄ぶな広場・宮竹灯ろうの設置作業 ベデフェス！の開催(9/30～10/11) NHKととちぎテレビのニュースで放送される	「西口デッキで来県選手歓迎 学生ら有志ベデフェス」 メンバーが分担し配布・商業施設などに掲示依頼 申請書や配置図を作成し提出 デッキ上に設置された電源の利用申請 9月18日に西口懇談会のメンバーを中心に作業 吉田カラーシステム(株)に無償制作を依頼 高橋が中心となり1時間程度園児に指導 申請書や配置図を作成し提出 目標額に到達 建築家・古溝氏の指導による ライブ&飲食は9/30-10/2、3日間で延べ3000人が入場 「とちぎ630」「とちぎテレビニュース」
10月	下野新聞に記事掲載 黄ぶな広場・宮竹灯ろうの撤収作業 協賛・協力企業・団体への結果報告・お礼まわり 西口懇談会でベデフェス！の反省会	「到着したら地酒を一杯 JR宇都宮駅 催し多彩」 3時間程度で終了 メンバーが分担し直接訪問 ベデストリアンデッキの今後の利用について意見交換

そしてそれらの企業に提案者たちが分担してお伺いし、ロゴの提供をお願いした。その結果、8社から黄ぶなロゴの提供を受けることができた。その他、宇都宮共和大学の学生にデザインの募集をかけ12件の応募があったほか、東地区にある二葉幼稚園の年長組園児たちに黄ぶなを描いてもらうワークショップを行い38のオリジナル黄ぶなが出来上がった(写真4左)。

次に作成・収集した黄ぶなを宮染めに添付する作業が必要である。オリジナルTシャツなどを作成するために市販されている「アイロンプリント紙」を購入し、インクジェットプリンターで黄ぶなを印刷する。それをアイロンで宮染めに添付するという方法を採った。8月27日に試作の制作を行い、9月18日に丸一日を費や

し、西口懇談会のメンバーとともに200mの宮染めに黄ぶなを添付していった(写真4右)。

最後に黄ぶなのデッキへの設置である。建築家の古溝氏の指導のもと、9月28日に設置作業を行った。デッキ転落防止柵の上部に薄い板を括り付け、そこに宮染めをタッカーと接着剤で張り付ける方法を採った。

## (2) おもてなしライブの実施

ペDESTリアンデッキでは、しばしば路上アーティストがライブを行っている。しかし、どのストリートライブも行政や警察に許可はとっていない。おもてなしライブでは、「アーティストが合法的にストリートライブを行う」ということをコンセプトに、路上アーティストなどにも出演を依頼した。また、トナリエ1階のララポケットで定期的にライブイベントを行っているLovin & S(ラビズ)や甲斐良信セッションバンド、東京オリンピックでDJを務めたNECO氏、さらにはマジックや太鼓演奏など、多彩なアーティストたちに出演を依頼した。音響は、ララステージ事務局に所属し、県内のライブで活躍する樋山崇氏に依頼した。

ライブの目玉は、9月30日16時からのオープニングである。オープニングでは、黄ぶなの制作でお世話になった二葉幼稚園の園児たちに来ていただき国体のイメージソングのダンスを踊ってもらうことにした。ダンスは9月20日に園にお邪魔し、レッスンを行った。さらに、宇都宮共和大学4年の学生がボーリングで国体に出場することから、栃木県のボーリング代表選手たちのトークイベントも企画した。



写真4 二葉幼稚園でのワークショップ（左）と宮染めへの黄ぶな添付・竹灯籠の制作作業（右3枚）

### （3）事業費用の捻出

本提案のテーマは「私のまちは私がつくる」である。提案者たちは、自分たちでまちを創り上げるためには、資金面においても自らの力で調達したいと考えた。そこで大手企業を中心にアポイントメントを取り、担当者に直接お会いし、協賛金を募った。結果として、17社（団体・個人）から計50万円の協賛金を集めることができた。コロナ禍のため協賛金に恵もられない企業もあったが、様々な事業者の方との交流は、今後就職活動を行っていく上でも良い勉強になった。また、提案者たちの心意気に感動し、他の会社を紹介してくれた企業担当者もおり、人の心を揺さぶる事業であることを実感した。また、どの方々も若者の主体的な活動にエールを送ってくれた。

以上のように、自力で資金集めはしたものの、総事業費100万円には及ばない。その他の資金は、乾杯フェスタ実行委員会や市国体局などの予算を充てていただいた。なお、参考までにはあるが、2019年に実施した茨城県での国体では、水戸駅前のペDESTリアンデッキで同様のイベントを実施している。その総予算額は1,000万円を超えている。多少の規模の差こそあれ、提案者たちは通常であれば1,000万円以上の費用がかかるイベントをたった100万円で行った。つまり、私たちの活動は100万円で1,000万円以上の価値を生み出していると言える。

### （4）ペデフェス！実行委員会の立ち上げ

本イベントは前述の西口懇談会が基礎となっているが、別途イベントを開催するための団体を設立することになった。それが「ペデフェス！実行委員会」である。会長には築瀬地域まちづくり推進協議会・会長で、西口懇談会のメンバーでもある栗原伸一氏に就いていただき、副会長を石川と指導教員である西山先生が担った（図1）。その他、地元企業や団体、行政などもメンバーに加わり、学生の活動を多彩な組織・個人が支える体制が整った。なお、駅ピアノは6月に宇都宮駅改札前で実績のあった宇都宮ジャズ協会単独のイベントとして行うこととなり、開催期間の調整やピアノの一部管理（カギ閉め）を提案者たちが担う「連携」というかたちを採った。

### （5）その他の事業と準備

ペデフェス！では、黄ぶな広場の設置やおもてなしライブのほかにも、様々な製作物やイベントを実施した。宮竹灯ろうは、若山農場から竹を4本購入し、自ら裁断し、穴あけから、LEDライトの取り付け、配線、電源の確保、設置、すべてを福田哲士と大久保友翔が中心になり行った（図5左下）。とちまるくんとミヤリーが描かれた顔はめパネルは、福田珠花がデザインした（図5右下）。また、プロジェクションマッピングは、故立松和平氏原作の『黄ぶな物語』を放映した（放映権を持っている(有)アートセンターサカモトのご厚意により無償で放映）。乾杯フェスタでは、当実行委員会が中心に行ったが、テント等の設営・撤収を行った。ペデフェス！や黄ぶな、宮染めの説明が必要と考え、B1サイズのパネルを作成した（写真5中上）。説明の文章を作成するにあたっては、福井染工場の福井規悦氏から宮染めについて、ふくべ洞の小川昌信氏から黄ぶなの歴史や現状についてそれぞれお話を伺った。ペデフェス！のチラシも自分たちでデザインした（図2）。デザインは石川が担い、補正を栃木県デザイン協会の宇賀地裕子氏にお願いした。

## 4.3 ペデフェス！の結果

9月30日16時から関係者の挨拶を皮切りにペデフェス！がスタートした（図3）。その後、とちまるくんとともに園児や学生、その他の参加者が国体ソングに合わせてダンスを踊り、超満員の

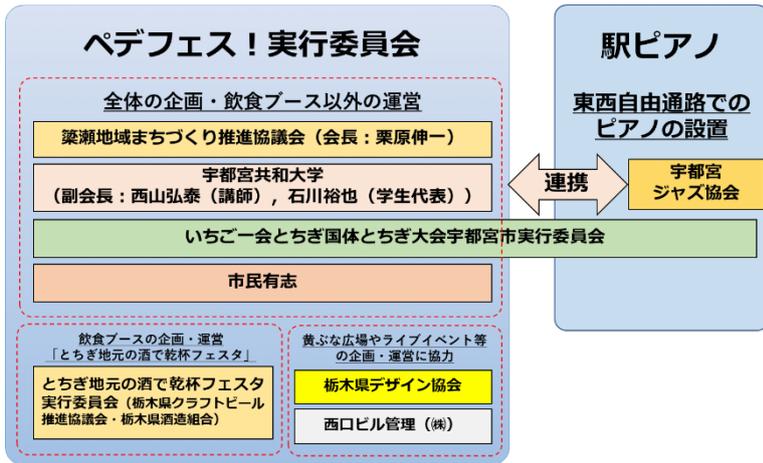
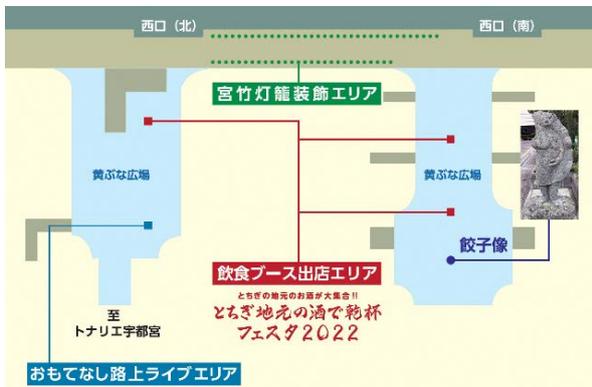


図1 ペデフェス！実行委員会の構成と役割



図2 ペデフェス！のチラシ



<b>9月30日(金) 前夜祭</b> 16:00~16:35 イベントスタート ・ペデフェス！実行委員会会長からの挨拶 ・子どもたちによる国体ダンス 16:40~17:00 国体出場者によるトークショー 17:10~17:40 Lovin&S 17:50~18:20 大道芸(マジシャン) 18:30~19:00 NECO 19:10~19:40 横田悠二 19:45~20:00 ・竹灯り ・プロジェクションマッピング (国体PR、黄ぶな物語の上映)	<b>10月1日(土) 国体初日</b> 16:00~16:30 下野不動太鼓保存会 16:45~17:15 HI3KI 17:30~18:00 宇都宮共和大学LMC 18:15~18:45 宇都宮大学フォークギター同好会 19:00~19:30 甲斐良信セッションバンド <b>10月2日(日) 最終日</b> 16:00~16:30 榎井 脩弥 16:45~17:15 竹田 侑海 17:30~18:00 甲斐 良信セッションバンド 18:15~18:45 上田大輔 19:00~19:30 Lovin&S
--	--



←ペデフェス！の開催を伝える9月30日のとちテレニュース(動画)

図3 ペデフェス！の会場レイアウトとプログラム

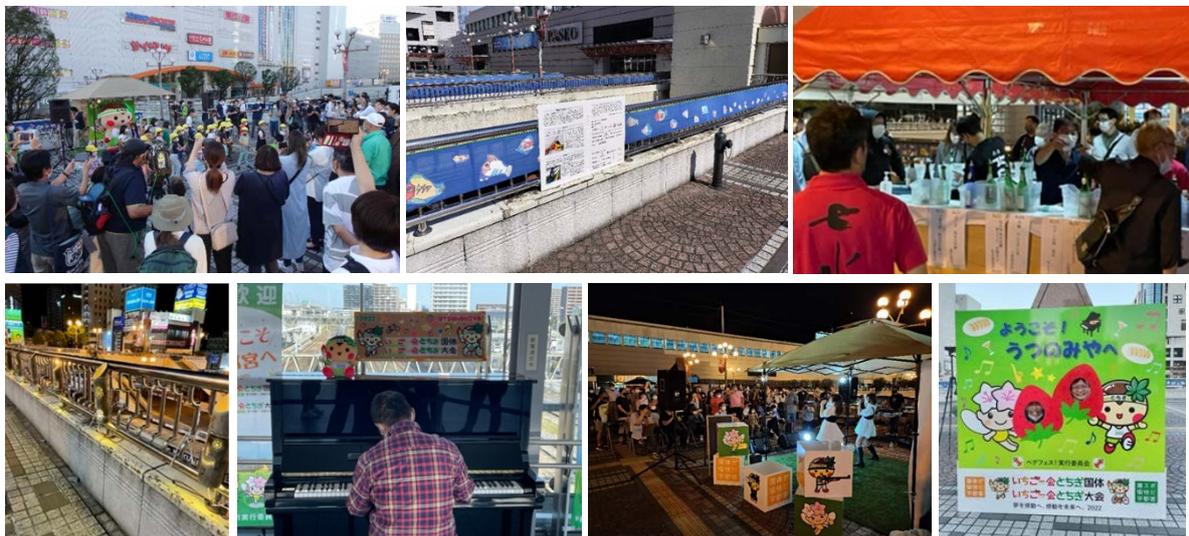


写真5 ペデフェス！の様子

観衆とともにボルテージは最高潮に達した。マスコミもNHKやとちぎテレビなどが取材に訪れ、注目の高さを実感した。その後のライブイベントでも、常に観客が50~100人はおり、多くの方々にイベントを楽しんでいただいた(写真5)。

飲食店も行列や売り切れが続出した。クラフトビールを販売した業者に1日目の売上を聞いたところ15万円を売り上げたという。3日間晴天に恵まれたことも幸いし、すべての出店者の方々に満足のいく売り上げを出してもらうことができた。2・3日目の昼間には、家族連れで訪れる方々

がかなり多かった。ベンチに座り、出店で購入したビールや焼きそばを食べながら、音楽に耳を傾ける姿が多数みられた。家族連れの方と話をしたが「こうしたイベントを毎週やってもらえるとありがたい。これからも続けてほしい！」とエールを送っていただいたのが感動的だった。また、売り上げや家族連れが訪れていたことから、内容次第ではペDESTリアンデッキが人々が集まる憩いの場として、そして交流拠点として機能することが証明できた。

期間中、大きなトラブルはなかったが、リスク管理の観点からの課題もみえてきた。ライブ中に観客が突然倒れ救護が必要だったこと（幸い大事には至らず）や、スリと疑われる人物がみられたこと（学生が気が付き声をかけて事なきを得た）など、一歩間違えば大きな事故や事件に発展する事象もみられた。傷害保険には加入していたものの、大きな事件が生じれば楽しいはずのイベントが台無しである。3日間で延べ3,000人が訪れたイベントであったが、不特定多数の人が参加するということは、その分リスクも増大することになる。リスク管理の重要性や難しさを考えるきっかけとなった。

#### 4.4 若者の持続的なまちづくり～「若者まちづくりアドバイザー制度」の創設～

今回実施したペデフェス！は、国体のおもてなしイベントとしては、日本ではじめての学生が主体になったイベントであった。2024年に国体が行われる佐賀県から職員が視察に訪れていたが、本イベントが学生主体に実行されたことについて驚いていた。このイベントは、学生がここまでのイベントを実行できることを証明した画期的なイベントであった。これこそが提案者たちの施策提案である。しかしながら、市国体局はじめ、地元自治会や企業など、様々な方々の協力なくしては、この成功はなし得なかった。最後にこうした学生のイベントを持続的に進めていくための方策を提示したい。

上述のような様々な組織からの協力は、学生だけでは受けられる範囲に限界がある。イベント成功の可否は、誰に協力してもらうかにかかっており、学生と協力者を結び付ける存在が必要である。今回は、指導教員である西山先生や市国体局の坂井氏、吉澤氏、政策アドバイザーの毛塚氏、西口ビル管理棟の山室氏の存在が大きかった。彼らが公私で有している人的ネットワークによって、様々な魅力的な方々を紹介してくれた。そこで、本提案の主催者であるうつのみや市政研究センターが「若者まちづくりアドバイザー制度」を導入することを提案したい。これはまちづくりを行いたい若者にアドバイザーを紹介する制度である。アドバイザーは市役所や公的団体の職員、大学教員、地域貢献に積極的な市内民間企業の経営者・職員等になっていただく。この提案を思いついたのは、今回提案者たちが様々な方々に協力していただくなかで「若者にいろいろなことを、自身の金銭的な利益に関係なく教えたい！」という志を持った方々が多いと感じたからだ。こうした志を持った大人たちが若者のチャレンジを支える仕組みと環境が出来上がることにより、将来の宇都宮のまちづくりを担う人材がたくさん生まれると考える。

同時に、学生に積極的に関わり、その活動に合ったアドバイザーを紹介するコーディネーターも必要である。これには学生たちの特性や立場を熟知し、さらに、庁内、市民、企業から信頼を得ている人物でなくてはならない。そこで「若者まちづくりコーディネーター」を市の正規職員から選出。その職員が市政研究センターに配置され、主に学生のまちづくり活動を支援する業務を行うというのはどうだろうか。その職員は当センターのプロパー職員（専任主事・主査）として従事し、長期間にわたり若者のまちづくり活動を見守る。そして道路占用許可などの複雑な手続きから協力者の紹介を行うのである。これにより、学生の活動が継続的に展開され、それがまちづくりの大きなうねりとなって、宇都宮を活性化させていく。

繰り返しになってしまうが、今回提案者たちが実行したペデフェス！は、学生の力でここまで壮大で魅力的なイベントを実施できることを証明した。こうした流れが宇都宮だけでなく、全国に広がっていくことを願っている。

#### 【謝辞】

ペデフェス！実施にあたり、100人以上の方と出会い、お世話になりました。本イベントにご協力いただいたすべての方に感謝申し上げます。